

南スーダン共和国

——「難民を助ける会」による支援活動から見た独立——

特定非営利活動法人 難民を助ける会 プログラム・コーディネーター かわの ひろみ
河野 洋

■南スーダン共和国の独立

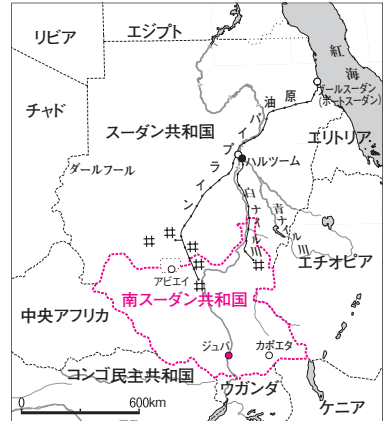
2011年7月9日、アフリカで54番目の国として南スーダン共和国（以下、南スーダン）が独立した。首都はジュバで、人口は826万（2008年）、面積は64万km²である。

独立の契機となったのは、2005年1月の包括的和平合意(CPA)である。スーダンはイスラム勢力(北部)とイギリス・エジプト両国(南部)の2つの勢力がせめぎ合ってきた。1955年に勃発した南北戦争に始まり(1972年終結)、その後も政権をめぐって、アラブ系と非アラブ系で対立を繰り返してきた。2003年に勃発したダルフール紛争では20万もの人々が殺害され、200万もの難民が生じた。現在は停戦状態にあるが、長年にわたるこれらの紛争には宗教、民族、資源などさまざまな要因が絡み合っている。そうしたなか、CPAはIGAD(スーダンとその周辺国で構成される政府間の開発機構)やアメリカ合衆国、ケニア、ウガンダが尽力することで結ばれた。このCPAが2005年から2011年の独立まで、暫定統治制度と国際的な監査システムを管理し、南スーダンの独立の是非を住民投票で問うこととなった。2011年1月9日から7日間にわたった住民投票では、住民の約99%が南スーダンの独立を支持していた。その半年後の7月9日、南スーダン共和国として独立に至った。

■独立記念日

2011年7月9日、首都ジュバは独立の歓喜に湧いた。各国要人が参加する記念式典や、街頭パレード、コンサート等も催され、住民たちの間には祝賀ムードが広がった。ジュバは2005年のCPAが結ばれた後に建設ラッシュが起り、コンクリートの建物や学校、舗装道路も整備されてきていた。新規ビジネスも増え、雇用も促進された。独立後も、空港や道路が建設中で、女子生徒の就学率も向上するなど街は大きな変化を続けている。

一方、そうした変化は地方まで波及しているわけではない。独立当日、難民を助ける会が事務所を構えるケニアとの国境近くの街、東エクアトリア州カポ



エタにいた現地スタッフによれば、ジュバの祝賀ムードとは裏腹にとても静かだったという。私が9月にカポエタに行った際も、独立による劇的な変化があるとは思えなかった。

カポエタの生活基盤は遊牧である。舗装道路やコンクリートの建物はほとんどなく、藁づくりの住居で生活している。独立後もその生活形態は変わっていない。

現地スタッフによれば、独立による大きな変化は、精神的な安心感を得られたことだという。村人は、「独立をむかえてやっと、草むらや山に逃げなくてすむ、家の外に出られるようになった」と話す。内戦時代は、女性は草むらで出産しなければならないほどの状況であった。独立前は、内戦状態に戻るのではないかという不安が依然としてあったが、独立後はその不安が一切解消され、また上記のような生活の制約がなくなったことが、大きな変化のようだ。

ある現地スタッフは、かつて南スーダンの自由のために直接戦闘に参加した自らの経験から、南スーダンの独立は自分たちの手で勝ち取った自由の証であり、大変うれしいと語っている。

■南スーダンが抱える問題

独立に際して新たな問題が生じている。石油収入をスーダン(北スーダン)と南スーダンとでど



井戸と子ども、日本人スタッフとともに

う配分するかという公共性の確定である。この地域全体の油田の8割が南スーダンに存在しているが、北部への輸送パイプラインや輸出港はスーダンが管理しているためだ。中国をはじめ、諸外国の介入もいっそう大きくなってきており、新たな紛争の火種となりつつある。

また、長い内戦で教師や医師などの人材が圧倒的に不足しており、妊婦の死亡率も世界で最も高い水準となっている。清潔な水を使える人も首都ジュバでさえ、まだ3割強といわれているほどだ。また、南スーダンでは「牛より大事なものはない」というほど牛が非常に重要な家畜であり、村の間での牛をめぐる争いは独立後も消えていない。銃が蔓延し、地雷や不発弾が眠っているところもあり、非常に危険な地域であるといえる。

■「難民を助ける会」の活動内容

南スーダンは、内戦の影響で発展が遅れ、病院や学校、上下水道施設といったインフラが整っておらず、それらの整備が必須であった。まずは、基礎的な生活レベルを維持するために、井戸水の確保や健康維持という保健サポートをしてきた。同時に、マラリアによる死亡率が大変高い地域であることをうけ、蚊帳の配布を行っている。マラリアの原因が蚊であることが人々にあまり認識されていないため、蚊帳の配布の際に衛生教育にも力を入れている。

当会は2006年から南スーダンで100本近くの井戸を掘ってきた。ほかの団体やNGOも井戸を建設しているが、建設した後の井戸の管理が問題となっている。手押し式の井戸は子どもたちには重くて扱いにくく、使い方が荒くなって故障する井戸が多い。当会は2009年から修理にも力を入れる



蚊帳の配布と指導

ようにしており、新しい井戸建設と既存の井戸の修理を並行して行っている。地質調査は業者に依頼し、メンテナンスは地元住民6人による井戸管理委員会が行う。委員会から井戸修理技術者を選出し、当会スタッフが管理法をトレーニングしている。今では、簡単な修理であれば任せられるようになってきている。

東エクアトリア州のラフォン郡では、人口10万に対して、医療サービスを提供できる診療所が圧倒的に不足していた。当会は簡易診療所を3か所建設し、診療所の運営や簡単な処方をする地域保健員の訓練を実施している。それでも、実際に医療サービスを受けられるのは郡全体で人口の半分にも満たない。国全体でも南スーダン政府が3か年の看護師育成トレーニングを実施するなど、本格的な人材育成は始まったばかりである。

■今後の活動と課題

当会は2006年7月にカポエタに事務所を構えて、緊急・難民支援や感染症対策などの活動をしてきた。独立によって人々の生活が大きく改善されたわけではなく、基本的なインフラ整備の要望はまだまだ高い。地域に根づき、地域の人々に応える形で活動できることが一番の強みであり、また役割でもあると考えているため、治安上、退避せざるを得ない状況にならない限りは、今まで通り水、衛生と保健事業、感染症対策事業を続けていきたいと思っている。

その際には、地域住民を巻き込むような住民参加型の支援方法が重要だと実感している。そのつど、支援のあり方を見直し、現場に即したやり方で支援していく必要性は現地スタッフとともに感じているところだ。

◆2011年11月10日、トルコ大地震で難民を助ける会の宮崎淳さんがお亡くなりになりました。宮崎さん、ならびに亡くなられた方々に謹んでお悔やみ申し上げます。また、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。